第一章 「在日小説」なるものについて 9
韓国・朝鮮通のニューウェーブ 10
違和感という壁 13
言葉の選択 15
在日朝鮮人文学の評価 18
「在日」観の検証 21

第二章 関川夏央の「在日小説」なるもの 25
関川の小説をひもとく 26
「在日」の眼、他者の眼 34
「まっとうな在日」 39
「別の次元」に開ける現実 42

第三章 李良枝の『由熙』評価をめぐって 47
『由熙』の現実を読む 48

2009 395152

第三章　李良枝の『由熙』評価をめぐって　47
『由熙』の現実を読む　48
無駄の果実　54
『由熙』のテーマ　58

第四章　在日朝鮮人は「在日文学」を読まないという説について　65
七〇万の中の七〇〇人　66
潜在的な読者　69
「在日」の精神世界　72
マイノリティの心の形　75
公平に対する偏執　79
日本人の「ふり」　84
民族学校に通う二、三世　87

第五章　在日朝鮮人は日本人になるべきか　93
前提の食い違い　94
歴史の捨象　98

特異なステイタス　102
「たいしてない」の裏側　108
民族主義の幻影　112
「市民」としての義務　117
偏見と無知の自認　125

第六章　偉くなった物書き、あるいは民族主義について　129
知っているつもり——書く者の倫理　130
現実から「現実主義へ」　133
「在日」の民族主義　136
イデオロギーと「在日のムラ」　143
「ムラ」の解体　149

第七章　「在日」内部へ　153
内部への眼差し　154

第六章 [illegible]
[illegible]
現実から「現実主義へ」 130
「在日」の民族主義 136
イデオロギーと「在日のムラ」 143
「ムラ」の解体 149

第七章 「在日」内部へ 153
内部への眼差し 154
「在日の無垢」 158
正義の熱 161
「在日」内部の相克 165
差別関係の転移 168
「在日」による「在日」の疎外 171
物言わぬ「在日」の多声化 178

第八章 帰化 185
帰化の話 186
帰化の歴史 189
帰化にまつわる心情 195
帰化の動機 202
反帰化派の心情と論理 206
帰化派と反帰化派との関係 211
「裏切り」と「同胞契約」 216

わたしにとっての帰化　225
「社会の核イメージ」　228
「社会の核イメージ」と帰化　232

あとがき　241